

自	の	フ	レ	ー	ム	ワ	ー	ク	を	用	い	る	こ	と	が	決	定	し	て	い	た	。		
2	.	与	え	ら	れ	た	品	質	上	の	目	標												
	今	回	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	で	与	え	ら	れ	た	品	質	上	の	目	標	は	、	総
合	テ	ス	ト	に	お	い	て	「	総	テ	ス	ト	件	数	に	対	し	て	バ	グ	摘	出	件	数
を	1	%	以	下	に	抑	え	る	」	で	あ	っ	た	。										
	そ	の	背	景	に	は	、	総	合	テ	ス	ト	の	後	工	程	の	運	用	テ	ス	ト	に	十
分	な	時	間	を	と	り	、	運	用	後	の	ト	ラ	ブ	ル	を	少	な	く	し	た	い	狙	い
が	あ	っ	た	。																				
	し	か	し	、	今	回	の	開	発	メ	ン	バ	は	全	員	A	社	独	自	の	フ	レ	ー	ム
ワ	ー	ク	を	経	験	し	た	こ	と	が	な	か	っ	た	。	し	か	も	W	E	B	の	開	発
経	験	も	少	な	か	っ	た	。	そ	の	た	め	、	設	計	書	お	よ	び	プ	ロ	グ	ラ	ム
の	品	質	低	下	の	リ	ス	ク	が	あ	っ	た	。	私	は	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	マ	ネ
ー	ジ	ャ	と	し	て	与	え	ら	れ	た	品	質	上	の	目	標	を	達	成	す	る	た	め	に
品	質	を	作	り	込	む	た	め	の	プ	ロ	セ	ス	・	品	質	を	確	認	す	る	た	め	の
プ	ロ	セ	ス	が	重	要	だ	と	考	え	た	。												

1	.	品	質	上	の	目	標	を	達	成	す	る	た	め	に	作	成	し	た	活	動	計	画		
1	-	1	.	品	質	を	作	り	込	む	た	め	の	プ	ロ	セ	ス								
	私	は	,	品	質	を	作	り	込	む	た	め	の	プ	ロ	セ	ス	と	し	て	開	発	リ	ー	
	ダ	に	「	標	準	規	約	書	の	作	成	」	を	指	示	し	た	。	な	ぜ	な	ら	ば	,	開
	発	メ	ン	バ	の	ス	キ	ル	任	せ	の	成	果	物	作	成	で	は	品	質	レ	ベ	ル	に	バ
	ラ	ツ	キ	が	発	生	す	る	。	そ	し	て	,	全	体	と	し	て	は	品	質	低	下	を	招
	く	と	考	え	た	か	ら	で	あ	る	。	私	は	,	作	成	さ	れ	た	標	準	規	約	書	を
	用	い	て	説	明	会	を	実	施	し	た	。	そ	し	て	標	準	規	約	を	守	る	こ	と	の
	大	切	さ	を	説	明	し	た	。	メ	ン	バ	か	ら	の	質	疑	応	答	に	も	応	じ	た	。
	さ	ら	に	,	品	質	を	作	り	込	む	た	め	の	プ	ロ	セ	ス	と	し	て	「	レ	ビ	ュ
	ー	の	徹	底	」	を	指	示	し	た	。	具	体	的	に	は	,	ラ	ウ	ン	ド	ロ	ビ	ン	方
	式	に	よ	る	レ	ビ	ュ	ー	を	実	施	さ	せ	た	。	こ	の	方	式	を	用	い	た	理	由
	は	,	ラ	ウ	ン	ド	ロ	ビ	ン	方	式	で	は	,	レ	ビ	ュ	ー	参	加	者	が	役	割	を
	分	担	し	て	レ	ビ	ュ	ー	責	任	者	を	担	当	す	る	。	そ	の	結	果	,	レ	ビ	ュ
	ー	参	加	者	の	品	質	へ	の	意	識	が	高	ま	る	と	考	え	た	か	ら	で	あ	る	。
1	-	2	.	品	質	を	確	認	す	る	た	め	の	プ	ロ	セ	ス								

	品	質	を	確	認	す	る	プ	ロ	セ	ス	と	し	て	以	下	の	基	準	を	設	け	た	。
設	計	書	に	関	し	て	は	、	1	ペ	ー	ジ	あ	た	り	の	予	定	レ	ビ	ュ	ー	指	摘
件	数	を	2	件	。	プ	ロ	グ	ラ	ム	に	関	し	て	は	1	K	ス	テ	ッ	プ	あ	た	り
の	予	定	バ	グ	摘	出	件	数	を	5	件	と	設	定	し	た	。	そ	し	て	、	レ	ビ	ュ
一	実	施	後	は	レ	ビ	ュ	ー	記	録	表	に	指	摘	事	項	を	記	載	さ	せ	た	。	さ
ら	に	、	作	成	さ	れ	た	レ	ビ	ュ	ー	記	録	表	を	も	と	に	予	定	レ	ビ	ュ	ー
指	摘	(バ	グ	摘	出)	件	数	と	実	績	レ	ビ	ュ	ー	指	摘	(バ	グ	摘	出)
件	数	と	の	差	分	管	理	表	を	作	成	さ	せ	た	。									
	差	分	が	大	き	い	場	合	に	は	、	品	質	保	証	チ	ー	ム	を	加	え	て	パ	レ
一	ト	図	を	用	い	て	の	原	因	の	分	析	を	行	わ	せ	た	。						
さ	ら	に	、	品	質	を	確	認	す	る	プ	ロ	セ	ス	と	し	て	信	頼	度	成	長	曲	線
に	よ	る	バ	グ	の	収	束	状	況	の	監	視	を	実	施	し	た	。	バ	グ	が	収	束	し
な	い	機	能	に	関	し	て	は	、	①	設	計	書	の	再	レ	ビ	ュ	ー	の	実	施	②	品
質	保	証	チ	ー	ム	に	よ	る	テ	ス	ト	ケ	ー	ス	の	見	直	し	③	追	加	テ	ス	ト
の	作	成	を	実	施	し	た	。	そ	し	て	、	実	施	後	は	バ	グ	の	収	束	状	況	を
引	き	続	き	監	視	し	た	。																

た	。	そ	し	て	理	解	し	た	内	容	を	他	の	メ	ン	バ	へ	横	展	開	さ	せ	た	。
2	－	3	．	外	部	設	計	段	階	で	の	プ	ロ	ト	タ	イ	プ	の	作	成				
	総	合	テ	ス	ト	段	階	で	の	利	用	部	門	の	参	画	が	十	分	で	な	い	場	合
の	リ	ス	ク	を	想	定	し	て	外	部	設	計	段	階	で	画	面	の	プ	ロ	ト	タ	イ	プ
を	作	成	し	た	。	そ	の	目	的	は	、	ユ	ー	ザ	に	十	分	に	操	作	性	を	検	証
し	て	も	ら	い	利	用	部	門	と	開	発	部	門	の	仕	様	の	ズ	レ	を	解	消	す	る
た	め	で	あ	る	。	そ	の	結	果	、	総	合	テ	ス	ト	段	階	で	の	仕	様	の	ズ	レ
を	極	力	抑	え	る	こ	と	が	出	来	る	。												
3	．	活	動	計	画	に	対	し	て	の	評	価												
	今	回	、	私	が	実	施	し	た	活	動	計	画	の	結	果	、	総	合	テ	ス	ト	で	も
バ	グ	摘	出	件	数	が	1	%	以	下	に	抑	え	る	こ	と	が	出	来	た	の	で	評	価
で	き	る	。	総	合	テ	ス	ト	で	、	バ	グ	摘	出	件	数	が	1	%	以	下	に	抑	え
る	こ	と	が	出	来	た	の	で	運	用	テ	ス	ト	期	間	も	十	分	に	確	保	す	る	こ
と	が	出	来	た	。	た	だ	し	、	以	下	の	改	善	す	べ	き	点	が	あ	っ	た	。	①
標	準	規	約	書	の	メ	ン	テ	ナ	ン	ス	②	パ	イ	ロ	ッ	ト	版	開	発	メ	ン	バ	の
選	定																							

論文添削結果

2010.04.15 (株) テレコムリサーチ
添削者：佐藤 創

【添削情報】

論文提出者：●●●●●様
問題：平成19年度 問3

【免責事項・その他】

本添削結果は、添削者個人の判断によるものであり、所属する会社や組織を代表する意見ではございません。また、本添削結果に即したからといって試験の合格を保証するものではありません。本添削結果の使用の結果生ずるあらゆる損害や被害について添削者は免責されるものとします。本添削結果の著作権は添削者に帰属します。

[目次]

1. 論文見出し構成の例
2. 論述すべき内容
3. 添削結果
4. 講評
 - (1) 添削結果の根拠について
 - (2) 講評の詳細
 - (3) 総評
5. 今後の学習に関するコメント

1. 論文見出し構成の例

以下に添削者が考える、本問題の見出し構成の例を示します。

1. 私が携わったプロジェクトの概要
 1. 1 プロジェクト概要
 1. 2 与えられた品質上の目標
2. 品質確保のための活動計画
 2. 1 プロジェクトの制約条件
 2. 2 品質確保のための活動計画
 - (1) 品質を作り込むためのプロセス
 - (2) 品質を確認するためのプロセス
3. 評価と今後の改善点
 3. 1 活動計画の評価
 3. 2 今後の改善点

2. 論述すべき内容

以下に添削者が考える、問題文から読み取れる題意と、求められる論述内容について、1. 論文見出し構成例に沿って示します。

見出し	論述すべき内容	備考
1. 1	プロジェクトの特徴、あなたの立場、求められる要件などを明記。 <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト概要、プロジェクト体制 ・工期、工数、契約内容、担当工程など ・あなたの立場・役割 ・プロジェクトの制約事項・条件など ⇒今回の論文では、品質目標や予算・納期などの制約条件は、1. 2以降に記述が求められているため、ここでは詳細に記述する必要は無い。記述するにしても概要や、伏線程度にとどめておく。	本論文では、計画プロセスのみを論じる。実行プロセスは論じない。論じるとしても3. 項の評価にて、計画を実行した結果の顛末を簡潔に記載する程度である。
1. 2	①プロジェクトに与えられた品質目標を具体的に記述すること ⇒信頼性、性能、操作性などの品質目標を具体的に記述すること。また品質目標が設定された背景（理由）についても記述を行う。	
2. 1	①プロジェクトの制約条件を具体的に記述すること ⇒品質保障計画を策定する際の制約条件となる、予算・納期、及びその他プロジェクト特性について具体的な記述を行う。なぜ制約条件が発生したかの背景（理由）も合わせて記述する。また、後に記述する品質保証計画の内容と、制約条件の内容が矛盾してはいけない。	2章は比較的論述の自由度が高いため、何でも書けそうだと思います。しかし、こうした問題こそ、問題文の題意に沿った論述を心がける必要がある。
2. 2	①品質保証計画策定についてポイントをはずさない記述をする ⇒問題文では、「品質を作り込むためのプロセス」、「品質を確認するためのプロセス」と抽象的に記述がされているが、これは具体的には開発工程とテスト工程に対応する。開発プロセスと、レビュー・プロセス及びテスト・プロセスの設計についての論述が特に求められている。 ②品質目標、制約条件、品質保証計画の3つが矛盾無く論述されていること	

	⇒制約条件に起因した、品質目標を達成する上での問題を解決できる品質保証計画を論述すること。特に、プロジェクトマネージャの視点での創意工夫や考えが十分に盛り込まれた論述が求められる。	
3. 1	①品質保証計画の実行結果の簡単な顛末を述べ、具体的な成果を挙げて客観的に評価していること。	
3. 2	①これまでの論述の内容と矛盾がない改善点を述べていること。	

本問は品質管理の計画プロセスに関して問われていますが、記載すべき内容の自由度が比較的大きいと思います。自由度が大きい分だけ、実務経験が豊富な人ほど書きやすい問題だと思います。しかし逆を言えば経験が少ない人ほど、題意を捉えにくい問題でもあります。特に、問題文にある「品質を作りこむためのプロセス」と「品質を確認するためのプロセス」という言葉に対して、すぐに具体的なプロセスが思い浮かばないようであれば、この問題は選択できないと考えます。

また、品質目標以外のプロジェクトの制約条件についても、具体的な論述が必要です。そして、その制約条件を十分に理解し、その影響を少なくするような工夫を盛り込んで、品質保証計画を策定するストーリー展開を論じる必要があります。

3. 添削結果

添削者が考える論文評価結果を、A～Dランクに分けて示します。合格はAランクのみです。

評価ランク	内容	判定
B	合格水準にあと一步である	不合格

※A～Dランクの評価内容は以下の通りです。

- A：合格水準にある
- B：合格水準にあと一步である
- C：内容が不十分である
- D：出題の要求から著しく逸脱している

添削者が考える、各種の詳細な評価項目について、それぞれA～Dランクを示します。

評価項目	評価基準	評価ランク	内容
題意の適切な盛り込み	設問や問題文で求められる題意が適切に盛り込まれていること	C	内容が不十分
論理性	論述に根拠があり、論理的な内容になっていること <ul style="list-style-type: none"> ・行動や考えの背景として、経験や知識、分析結果に裏付けられた根拠が論述されていること ・行動した結果やプロジェクトの顛末を書いただけの論文になっていないこと ・論述が、具体的・定量的で、かつ論理的であること 	B	合格水準にあと一步
プロマネの創意工夫	プロジェクトマネージャとしての創意工夫・判断基準が盛り込まれていること <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトマネージャらしい総合的な考え方（創意工夫）を論述していること ・プロジェクトマネージャの役割や責任を理解した上で、適切な行動等について論述していること ・専門用語などは本来の意味や目的を理解して用いていること 	B	合格水準にあと一步
文章表現	文章表現が適切で、かつ理解しやすい文章であること <ul style="list-style-type: none"> ・論文としてふさわしい文章表現であること ・文章の内容が理解しやすいこと ・助詞などの用法に誤りがないこと ・誤字脱字がないこと 	A	合格水準にある

4. 講評

添削者が考える講評について示します。

(1) 添削結果の根拠について

評価ランクがBである理由は以下です。

1. 題意の適切な盛り込み

いくつか主要な題意を盛り込めていない。このため評価が低くなっている。

- ①品質目標は操作性、保守性、信頼性などの品質モデルに沿ったものを設定して欲しい。
- ②品質を作り込むプロセス、品質を確認するプロセスの実行計画（品質保証計画）を、どのように策定したかという論述が求められているが、論述の時間軸がプロジェクト実行時点になっている。
- ③先に述べた品質目標に関連のない内容を達成しようとしている。
- ④品質保証計画が、プロジェクト制約（予算・納期など）の影響を受けていない。

2. 論理性

施策の根拠の論述が不足している箇所があった。論理の飛躍をしていると感じる箇所もあった。

- ①開発規模が、開発体制と比較して少ないと感じる。
- ②品質目標である「バグ摘出率」が、目標として適切でないように感じる。
- ③ラウンドロビン方式でのレビューによって品質の作り込みが達成できると考えた根拠の論述が不足している。
- ④レビュー指摘数の基準を定めた根拠が述べられていない。
- ⑤2度レビューすることでの工数増加を抑制するための施策内容が、適切であると思えない。
- ⑥ブレインストーミングを行うことによって、どんな効果を期待しているのかが分からない。

3. プロマネの創意工夫

プロマネの考えが多少検討不足であり、創意工夫が足りないと感じる箇所がある。

- ①どのような考慮を標準規約書に盛り込むことで、品質目標を達成しようとしたのかわからない。

4. 文章表現

特に問題はないと考える。1箇所だけ、文言を誤って使用している箇所がある。

- ①文言を誤って使用している箇所がある。

以下に詳細の講評と、総評を示します。

(2) 講評の詳細

詳細講評については、論文の流れに沿って設問アから順に説明させていただきます。説明の内容が、(1) 添削結果の根拠 のいずれに相当するのかを各説明に示します。ただし、文章表現に関する指摘は最後にまとめて行います。

なお、講評中で例文を示すことがあります。あくまでも参考までとして頂ければ幸いです。もちろん例文をそのままご利用されること自体には全く問題はありません。それによる「文字数の配慮」、「論文の流れとの整合性」等々につきましては十分ご考慮いただけますよう、宜しくお願い申し上げます。

(ア) [評価項目：論理性 指摘番号：①]

「1. プロジェクトの概要」において、開発規模は60人月と述べられております。しかし、開発期間10ヶ月、開発メンバ10名という体制を考慮した場合、60人月は少ないように思いました。常時10名がプロジェクトに参画していない場合も考えられますが、素直に100人月と述べておいたほうが、読み手に対して余計な疑問を抱かせずに済むように思います。

(イ) [評価項目：論理性 指摘番号：②]

「2. 与えられた品質上の目標」において、「総テスト件数に対してバグ抽出件数を1%以下に抑える」と述べられております。この目標の分母が「総テスト件数」である点に疑問を抱きました。通常は分母に「開発規模」を持つてくることが多いと考えます。これは、開発した量が多ければ多いほどバグも多く埋め込まれる、という考え方に基づいています。これに対し、「総テスト件数」を分母にした場合、テスト件数が多ければ多いほどバグも多い、という考え方に基づいたメトリクスであるように捉えられてしまいます。つまり、品質が極端に悪く、テストすればするだけ不具合が発生するシステムを想定しているように感じてしまいます。実際は、そのような想定をしていないと考えられますので、分母としては「開発規模」を用いることがふさわしいように思います。この点についてご確認をお願い致します。

また、不具合密度（バグ密度）といった指標は、上限/下限を定めて適用することが通常です。指標よりもバグが多くても少なくても問題が潜んでいると考えられるからです。この点についても考慮が不足しているように感じました。

(ウ) [評価項目：題意の適切な盛り込み 指摘番号：①]

「2. 与えられた品質上の目標」では、操作性や信頼性などの品質目標を述べる必要がありました。これはシステムの目的や用途を与件として、目的に合った適切な品質目標を設定することが大切だからです。例えば、システムの用途がミッション・クリティカルなものであれば信頼性はとても大事な指標です。大量のデータを捌く必要があれば効率性（時間効率性＝処理能力）が最も大切な指標になります。このように、システムの目的を背景として、それにふさわしい品質目標を設定する必要がありました。本論文では、バグ検出率という、システムの目的とは関係なく、どのようなプロジェクトにおいても一般的に管理すべき指標を挙げております。この点が題意を反映できていないと考えます。

どのようなシステムの特性を品質目標として定めるのかは、JIS X0129-1の品質モデルの考え方を参考にして頂きたいと思えます。機能性、信頼性、使用性、効率性、保守性、移植性の6つの特性を定めており、また各特性を細分化した副特性が定められております。例えば、信頼性の副特性としては、成熟性、障害許容性、回復性などがあります。また、

効率性の副特性としては、時間効率性、資源効率性などがあります。こういった知識を基に品質目標を設定する必要があると考えます。

(エ) [評価項目：題意の適切な盛り込み 指摘番号：②]

設問イは、プロジェクト計画時点で、どのような品質の作り込みプロセス・品質の確認プロセスを計画したかを論述する箇所です。よって論述する時間軸は、プロジェクト計画時点であり、プロジェクトの実行時点ではありません。

これに対し、本論文ではプロジェクト実行時点での論述をしております。論調が「〇〇した」といったように過去形になっており、実際にプロジェクトが実行されてからの論述となっています。

この点は、大きく題意を外しているのではないかと考えられます。本問題は、品質目標を達成するための品質保証計画を、どのように適切に策定できているのかを評価する問題です。さらに、品質保証計画はプロジェクト制約を満足する形で計画しなければなりません。品質を確保するために、あれもこれもと全ての施策を網羅的に行うことはできません。納期や予算の制約を満足しながら品質目標を達成するために、いかに創意工夫して品質保証計画を策定したのか、その計画力を評価する問題です。計画力に加え、プロマネがプロジェクトの将来を見越した計画を立てられているか（予見力）、各種制約を満足するように創意工夫ができていかなどを評価します。この点についてご確認をお願い致します。

(オ) [評価項目：プロマネの創意工夫 指摘番号：①]

「1-1. 品質を作り込むためのプロセス」において、標準規約書を作成したと述べられております。しかし、どのような内容の規約を定めることが、品質目標の達成に効果的だと思ったのが述べられておりません。単に標準規約書さえ作成すればよい、と読み手に伝わってしまう可能性もあり、この点において創意工夫が足りなかったのではないかと考えます。

例えば、Web 開発経験が少ないこと、A社フレームワークの使用経験がないことなどを根拠に、過去の事例やプロジェクト資産から、開発標準を作成するような方向性で論述すれば良かったのではないかと考えます。

(カ) [評価項目：論理性 指摘番号：③]

「1-1. 品質を作り込むためのプロセス」において、ラウンドロビン方式のレビューを開催することで、メンバの品質への意識が高まり、品質の作り込みにつながる、と述べられております。しかし、メンバが役割を分担してレビューをすることで、メンバの品質への意識が高まる理由が明確に述べられていないと考えます。どういった理由で品質への意識が高まるのでしょうか。

なお、ラウンドロビン方式のレビューは、開発工程のどこに適用する計画だったのかが読み取れませんでした。後の論述では、成果物への2回のレビューを計画したと述べられております。そのレビューと、ラウンドロビン・レビューは同じものなのでしょうか。もしそうだとしたら、2回のレビューだけで各メンバが全ての役割を持ちまわりできるのが疑問ですし、適任ではないメンバがレビューの重要な役割に任命された場合に、きちんと品質を確保できるのが疑問です。

以上のように本論文で述べられている施策が適切であると判断できる根拠の論述が不足しております。

(キ)〔評価項目：論理性 指摘番号：④〕

「1-1. 品質を作り込むためのプロセス」において、レビュー指摘件数の基準などを述べております。しかし、なぜこの基準を採用することで、品質目標を達成できると考えたのかの論述が不足していると考えます。

また、信頼度成長曲線を採用しておりますが、これを用いることでどんな問題や課題に対応しようと考えたのか、また、これによってどんな効果を期待したのかなど、プロマネの考えの論述が不足しております。

単に思いついた施策を並べただけにも捉えられかねません。なぜこのような施策を打つ必要があると考えたのか、また、この施策でなぜ品質目標を達成できると考えたのか、をあわせて述べる必要があると思います。

(ク)〔評価項目：論理性 指摘番号：⑤〕

「2-1. マイルストーンの設定」において、2回の成果物レビューを行うことでの工数増加を抑止する施策が述べられております。その施策内容は、「レビューが完了した機能のレビュー記録表にメンバが目を通すこと」とありますが、これによって、なぜ工数増加を抑えられるのかが分かりませんでした。

論理の飛躍をしているようにも思いますので、行間を読ませるのではなく、論理を1つ1つ丁寧に文章にして述べる必要があります。それが論文ですので、「この程度の文章で意味が通じるだろう」と考えず、論理を丁寧に述べて行って欲しいと思います。

また「2-2. パイロット版開発の実施」においても、パイロット版の作成の目的が「製造着手後の安定した生産性を確保するため」と述べられておりますが、パイロット版を作成することと、安定した生産性の確保がすぐに結びつきません。この点も論述を省略してしまっているのではないかと思います。

(ケ)〔評価項目：題意の適切な盛り込み 指摘番号：③〕

「2-3. 外部設計段階でのプロトタイプ作成」において、操作性の確保のためにプロトタイプ作成を行ったと述べられております。しかし、当初の品質目標に、操作性の確保は述べられておりませんでした。この点、品質目標と関連のない施策を打っているように捉えられてしまいます。品質目標と関連する施策についてのみ、論述なさると良いと考えます。

(コ)〔評価項目：題意の適切な盛り込み 指摘番号：④〕

設問イにおいて、品質保証計画の策定にあたり、プロジェクト制約を加味して、現実可能な計画になるように創意工夫した内容が述べられておりませんでした。問題文には「プロジェクトマネージャは、与えられた予算や納期の範囲内で実行可能な計画を作成しなければならない」と述べられておりますし、設問文にも「予算や納期の範囲内で実行可能な計画にするために・・工夫した点を具体的に述べよ」と示されております。これは本問題の主要な題意であると考えます。この点において、題意を満たしていないと考えます。

(サ)〔評価項目：論理性 指摘番号：⑥〕

「4-1. 標準規約書のメンテナンス」において、今後はブレインストーミングを用いたいと述べられております。しかし文脈上は、ブレインストーミングを用いる必要があったとは思えませんでした。規約の改版機会を定期的に持つ、という内容だけで十分であったと思います。自由な意見交換がなかったことが、今回プロジェクトの反省点ではないと思

いますので、これまでの論文中に関連のない内容は、むやみに述べないほうがベターだと考えます。

(シ)〔評価項目：文章表現 指摘番号：①〕

(1)

- 【設問】 イ・ウ
- 【ページ】 3 ページ
- 【行数】 7 行
- 【指摘内容】 文言が誤っている
- 【指摘箇所】 出戻り工数が大きくなるリスク
- 【修正例】 手戻り工数が大きくなるリスク

(3) 総評

以下に本論文を振り返り、良かった点や指摘のまとめをさせていただきます。

設問アの第1節は、プロジェクトの目標や開発体制について簡潔に述べられており、良かったと思います。

設問アの第2節は、品質目標の捉え方を間違えていたように思います。この点について修正が必要だと思います。

設問イに対応する箇所では、題意を捉えられていないと思える箇所が多かったと考えます。また、施策の根拠や、品質目標との関連性がうかがえず、単に施策を並べていったようにも思えます。もっとストーリー展開や題意に忠実な論文作成を心がける必要があるように感じました。

設問ウに対応する論述は、述べている内容自体は特に問題はないと考えますが、設問ア、設問イの論述内容の修正に伴って、今後変化すると考えられますので、現時点ではあまり評価することができないと感じました。

5. 今後の学習に関するコメント

題意を適切に把握できていない箇所が多いと感じました。また、設問イの施策の論述において、個々の論述がパーツのようにちりばめられており、全体としてストーリーをうまく形成できていないと感じました。その結果、施策と品質目標やプロジェクト制約との関連性が述べられておらず、題意が盛り込めなかったのではないかと推察致します。

やはり題意をきちんと把握されることと、単に施策をパーツのように並べるのではなく、1つのストーリーとして統合することが大切だと思います。

題意を把握するには、「この問題を出すことによって、出題者は受験者のどのような能力を測ろうとしているのか」を考えることも有効です。といっても、これはなかなか実行することが難しいです。単に題意を把握するための1つの手法であるということで紹介させていただきます。もしこういう考えがなかった場合は、少しだけでも出題者の意図を考えてみると、新たな発見があるかもしれません。

以上、添削結果のご確認の程よろしくお願ひ申し上げます。

添削結果の送付が試験直前になってしまい、大変ご迷惑をお掛けいたしました。

以上